

ランプ下の語らいと

先鋭的ヒマラヤ登山

——北大山岳部の姿

プロlogue

「チャムラン——ヒマラヤの詩」と真実』(ベースボール・マガジン社)の序文で、百名山の著者として知られる深田久弥は、こう記している。

「かつて私は、北大山岳部OBおよび現役の諸君に連れられて、日高の山へ入ったことがある。近ごろ、各大学の山岳部はそれぞれのカラーが薄れて、一様化してきたような気がするが、北大はまだそれをがんこに保っていた。率直で、自由で、野性的で、いかにも北海道の山をのし歩いているのに似つかわしいところがあつた。

このチャムラン紀行を読んで、私は北大山岳部のカラーを強く感じた。各自、ズケズケかつてなことを言いながらも、根は友情と信頼に結ばれている。……切りつめた費用で、北大らしい山行きをしている点がおもしろかった。」(注)



浜名 純
(昭48農)

チャムランはネパールにある北大が初登頂した7319mの高峰)

これは、1965年の執筆だが、その姿は現在の北大山岳部にもそのままあてはまる。近年、各大学山岳部の凋落ぶりはすさまじい。名門大学山岳部でも部員が減少し、活動がままならなかつたり、廃部にいたつた例も枚挙にいとまがない中で、10人を超える部員を擁するのは、不思議がられているほどである。

北大山岳部が部員全員で合宿するのは、1年のうちわずか10日弱、あとは個人山行という登山スタイルを貫く。北海道の風土がそんな自由な発想を生み、今につながる伝統を築いたといえるだろう。



50年記念誌に収録。ペテガリ岳巣冬期初登頂(昭和18年12月31日—1月9日)、隊員:渡辺良一、佐藤弘、莊田幹夫、上杉寿彦、今村昌耕。長髪尾根からコイカクシュ札内岳を経て尾根伝いにアタック。1月5日佐藤弘、今村昌耕が登頂に成功。1月5日頂上アタック、ペテガリ近し、撮影:今村昌耕



今村昌耕、住宮省三の両名による積雪期ペテガリ岳初登頂(5月4日) 昭和16年4月25日—5月9日、長髪尾根→ヤオロマップ→1599→ルベツネ→ペテガリ
撮影:今村昌耕、ペテガリ岳頂上へ

創立と足跡

さて、北大山岳部が創設されたのは1926(大正15)年11月10日。日本のスキー発祥の流れをくむ北大スキー部と恵迪寮旅行部を

前身として創立された。スキー部からは、雪山への憧れを、旅行部からは原始に満ちた北海道の自然を探求する心を引き継いだ。この年12月、蘭越新見温泉に47人が集い初めての合宿を行つたのを皮切りに、十勝、大雪、利尻

芦別、阿寒、知床など全道の山々に足跡を残した。

そして、日高山脈の初登頂期を迎える。本稿は山岳史ではないので、細かい初登頂の記録は省略するが、冬期日高山脈の集大成として1964（昭和39）年度には、日高山脈・ペテガリ岳の集中登山を実施した。

本州の山と違つて北海道の山々



1982年9月 1983年1月 ダウラギリI峰巔冬期登頂 ベースキャンプの隊員集合写真 左より工藤、清野、下沢、志賀、浜名、石村、小泉、花井、毛利、越前谷の各隊員 登攀



1982年9月 1983年1月 ダウラギリI峰巔冬期登頂 北東稜キャンプ1直下。ユマールを使っての登降。登攀

トに突き上げる「直登沢」の初廻行を目指すようになり、現在に至る。しかし、多くの犠牲もあった。

北大山岳部の活動は日本国内に留まらず、世界の山々に広がっている。ヒマラヤの研究は戦前に始まり、以来、初登頂もふくめて大きな成果を挙げてきた。

1962（昭和37）年にチャムラ

夏（無雪期）については、1960年代に入ると、より難しいルートを求め、頂上にダイレクトに突き上げる「直登沢」の初廻行を目指すようになり、現在に至る。しかし、多くの犠牲もあった。

海外遠征の数々

北大山岳部の活動は日本国内に留まらず、世界の山々に広がっている。ヒマラヤの研究は戦前に始まり、以来、初登頂もふくめて大きな成果を挙げてきた。

1962（昭和37）年にチャムラ

ン（7319m）に初登頂したのをはじめ、多くの遠征隊が海外に出ている。

主なものを挙げると、エベレストスキー探検隊参加（1970）、カラコルム・クンヤンチッショ北峰（7108m）初登頂（1979）、バルンツェ1峰（7220m）厳冬期初登頂（1980）、ダウラギリ1峰（8167m）厳冬期初登頂（1982）などである。2000年以降は、アラスカ・デナリ峰、北欧ケブネカイセ峰、ペルーアンデスなどがある。

数々の遠征の中でも、バルンツェ1峰は、世界で初めての厳冬期7000m峰登頂であり、ダウラギリ1峰は世界で初めて厳冬期の8000m峰登頂である。これは、北海道の山で培った技術とアカデミズムの成果と自負している。

また、山岳部の出身者は、登山だけではなく極地の学術研究にも積極的に参加、南極観測隊、ヒマラヤ調査隊、北極やアラスカ、南北米などをフィールドとして活躍している。

2つの山小屋管理

一方、北大山岳部では、北大所有する山小屋のうちの二つを管



空沼小屋は1928年（昭和3年）、秩父宮様が建設した小屋で、幌近郊の空沼岳への途中、静かな

理している。札幌市郊外のヘルベチアヒュッテと空沼小屋だ。ヘルベチアヒュッテは、1927（昭和2）年、建築家マックス・ヒンダーリー、北大講師アーノルド・グブラーの二人のスイス人および北大教授山崎春雄の三氏によつて小樽内川上流に建設され、スイス国の古名にちなんでヘルベチアヒュッテと名付けられた。日本でも最も古い丸太小屋の一つで、札幌市の空沼岳への途中、静かなるふるさと100選にも選ばれている。



一回の札幌での総会や現役部員の登山の支援、海外遠征の立案実施などの活動を行つてゐる。

北大山岳部のOB会組織が「北大山の会」である。札幌に本部を置き、東京、東北、関西の3支部がある。会員数は約600名で年一回の札幌での総会や、現役部員の登山の支援、海外遠征の立案実施などの活動を行っている。

沼のほとりにある。ただし、老朽化が激しいため、2009（平成21）年に、学内外の有志の集まりである「空沼小屋の保存を考える会」が発足し、修復・保存のための活動を開始した。

OB会の活動

一方、山の会東京支部では、東京近郊の低山歩きを楽しむ2カ月に一度の「ワンドリー・ハイク」や、秋の月見の宴、スキーの宴、「山の四季」などの活動を定期的に行っている。

1995(平成7)年には、山を愛する人々に、コミュニケーションの場や資料を提供することで、お互いの理解を深め、夢を語り、育てていく環境を作ることを目的とした北海道大学山岳館が誕生した。北大山岳部と北大山の会は、この山岳館の創設に携り、建設後に大学へ寄贈、学内共同使用設備となつたのである。山岳館には、創部以来80余年にわたつて蓄積されてきた文献・山岳書・地図などの資料が集められて公開されてい

また、CSR活動にも力を入れ、市民公開講座を開催したり、JICAシリバーボランティアなどにる。

エピローグ

北大山岳部は、山にロマンを求めるものから先鋭的登山を目指すものまですべてを抱擁してきた。そう、卒業まで小屋番に明け暮れる者からヒマラヤの木踏峰を目指す者まで多様な人材が存在するのだ。部員は日頃、互いに相手の主張を理解しながら自分の欲する登山を楽しんでいる。そこが、他の「しごき」の大学山岳部との相違であり、現在も健全に存続している理由であろう。

だから、タテのつながりには強固なものがある。厳寒の吹雪の夜、小屋の薪ストーブで暖をとりながら思いにふける。ランプの下で友と一献傾け語り合う。そんな青春の一こまへの郷愁が、世代を超えて人を結びつけるのだ。

(注：各写真の右下にあるバッジは山岳部の部員章。入部したから誰にでもくれる山岳部の員ではなく、3年生になつて北大の山岳部員として「恥ずかしくない」ことを認められた者が受けとることができる。一番うれしいときである。しかし、もつた3年生たちは、狸小路の居酒屋「つる」で部員全員におこるのが慣習である。)